

今週の為替相場見通し(2025年6月30日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ	
		注	レンジ	終値		
米ドル	(円)		143.76 ~ 148.01	144.65	142.00 ~ 147.00	
ユーロ	(ドル)		1.1452 ~ 1.1754	1.1723	1.1580 ~ 1.1880	
(1ユーロ=)	(円)		167.52 ~ 169.80	169.52	167.50 ~ 172.50	
英ポンド	(ドル)		1.3373 ~ 1.3770	1.3715	1.3400 ~ 1.3900	
(1英ポンド=)	(円)	*	195.82 ~ 198.81	198.47	195.00 ~ 200.00	
豪ドル	(ドル)		0.6373 ~ 0.6564	0.6534	0.6400 ~ 0.6570	
(1豪ドル=)	(円)	*	93.85 ~ 94.85	94.47	92.50 ~ 95.50	

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 武藤 智哉

(1)今週の予想レンジ: 142.00 ~ 147.00 円

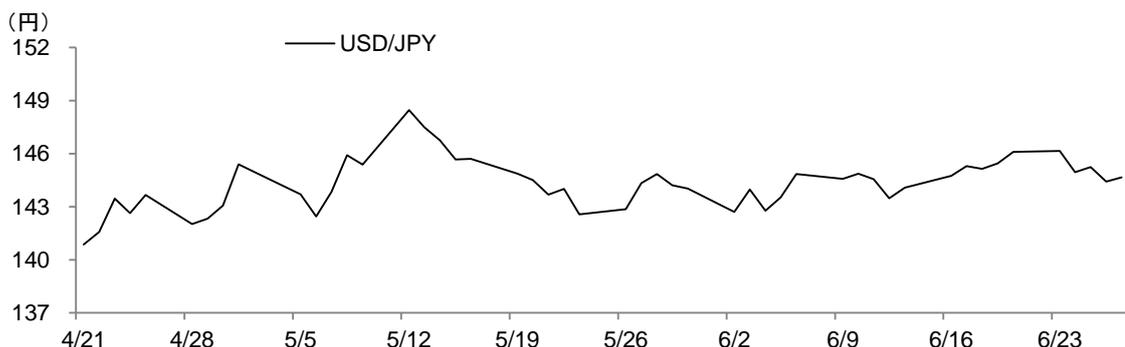
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は中東情勢の激化を背景に急伸後、じり安の推移となった。週初 23日146.21円でオープンしたドル/円は、米国がイランの核施設を攻撃したことで、有事のドル買いや貿易収支悪化懸念によるドル高円安が進み、ドル/円は一時週高値の148.01円まで上昇した。その後、イランの報復措置が限定的と見られたことや米金利低下を受けて、146円台前半まで押し戻された。24日はイランとイスラエルの停戦合意を受け、有事のドル買いの巻き戻しが入り軟調に推移。米国時間にはパウエルFRB議長の議会証言で利下げの可能性が示唆され、ドル売りが加速し 144円台後半まで下落した。25日は田村日銀審議員の発言が意識され、欧州時間にかけて146円付近まで上昇したが、その後は米金利低下の影響もあり上値重く推移した。26日はトランプ米大統領の次期FRB議長早期指名検討報道や米1~3月期GDPの下方修正が嫌気され、一時週安値の143.76円まで下落。27日は週末を控えて様子見ムードが広がり、144円台半ばで売買が交錯。米6月コアPCE発表後は144.90円付近まで上昇したものの方向感を欠き、144.65円で取引を終えた。

今週のドル/円は上乗せ関税の一時停止措置の期限が7月9日(水)に迫る中、ヘッドライン次第で上下に振られる展開が想定されるものの、方向感としてはドル安円高での推移になると予想する。足許では米利下げ観測の高まりを背景に、ドル売りの流れが広がる中、7月3日(木)に発表の米6月雇用統計に注目が集まる。今月は非農業部門雇用者数の減少と失業率の小幅上昇が見込まれており、結果が予想通りでない、下振れる場合にはFRBの利下げ圧力が強まることから、ダウンサイドリスクの方が大きいと考える。また、先週末にはトランプ政権が進める大型減税法案の動議が米上院で可決されたことを受け、トランプ米大統領の設定する7月4日(金)までの法案成立が現実味を帯びてきている。法案成立は、株式市場の押し上げ要因となる一方で、米財政悪化懸念が再燃、ドル離れが加速し、ドル/円については下押し圧力になると見ている。今週は、7月1日(火)に本邦で4~6月期日銀短観、米6月ISM製造業景気指数、米5月JOLTS求人件数、2日(水)に米6月ADP雇用統計、3日(木)に米6月ISM非製造業景気指数と複数の重要指標の発表を控える他、6月30日(月)から3日間開催されるECBフォーラムにて、ラガルドECB総裁やパウエルFRB議長をはじめとする各国中銀総裁による討論会が予定されている。目下、市場の関心が金融政策や通商政策へと回帰する中、米関税措置を受けた物価動向や政策金利の見通しについて、どのような発言がなされるか注目したい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(6/23~6/27)の値動き: 安値 143.76 円 高値 148.01 円 終値 144.65 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.1580 ~ 1.1880 167.50 ~ 172.50 円

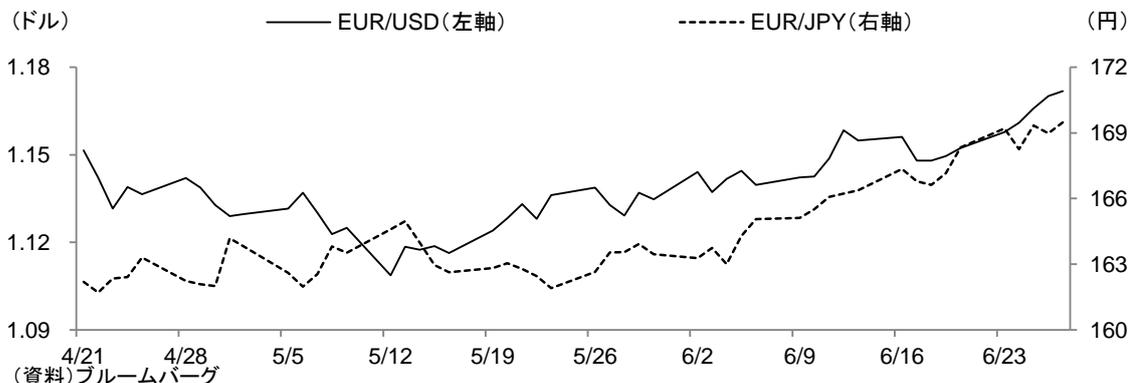
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

週初23日のユーロ/ドルは、中東情勢の緊迫化を受けた有事のドル買いを背景に、オセアニア市場にて一時週間安値となる1.1452まで下落後、1.1505でオープン。一服後はパウエルFRB理事の7月利下げに前向きな姿勢を見せた発言やイランによる米国への報復攻撃が限定的になるとの見方からドルが売り戻され、1.15台後半まで値を上げた。24日はドル買いの巻き戻しが続く中、パウエルFRB議長が議会証言で利下げの前倒しについて言及したことや米経済指標の軟調な結果を受けたドル売りをサポートに1.16台前半まで上昇した。25日は特段新規材料のない中で、同様の流れが継続。1.16台半ばまでやや水準を上げる展開となった。26日はトランプ米大統領が次期FRB議長の早期指名を検討との報道により、米国の早期利下げの思惑が高まったことを受けたドル売りや、NATOの防衛費引き上げ目標の合意などを材料としたユーロ買いも背景に、1.17台半ばまで上昇し、終盤も高値圏での値動きを維持。27日は米経済指標の弱めな内容を背景としたドル売りに、一時週間高値となる1.1754まで上昇。その後のトランプ大統領のカナダとの貿易協定を打ち切るとの発言を受け、多少下押し場面が見られたものの、ほどなくして値を戻し、1.1723で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は、堅調な推移になることを予想する。前回のECB政策理事会で、金融緩和サイクルの終わりについての言及がされた一方で、米国はここ最近の米経済指標の内容や一部のFed高官の発言を材料に、利下げ織り込みが徐々に進行しつつある。トランプ政権の各種政策に対する不透明感を背景としたドル離れは落ち着きを見せているように思われるものの、両国の明確な金融スタンスの違いが、今後のユーロ/ドル相場のサポートになると考えている。6月30日(月)と7月2日(水)にはラガルドECB総裁の講演が予定されており、より具体的な利下げ終了時期への言及があった場合は、ユーロ相場を更に押し上げる展開を想定しておきたい。また、主要中銀の会合を通過し、中東情勢にも一服感が見られる中、7月9日(水)に到来する米国の追加関税の延長期限までは、大きなイベントは見当たらない。ヘッドラインや経済指標の結果に一喜一憂するような相場が想定されるが、関税交渉において、米閣僚からは発動時期の再延長の可能性が示唆された一方で、トランプ大統領からその可能性が否定されるなど事態が混沌とする中、欧州の対立姿勢が他国と比較してやや強硬に映っている点は気がかりで、両国の交渉の進展状況を示すヘッドラインには注意をしておきたいところだ。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/23~6/27)の値動き: (対ドル) 安値 1.1452 高値 1.1754 終値 1.1723
(対円) 安値 167.52 高値 169.80 終値 169.52



3. 英ポンド

欧州資金部 神田史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3400 ~ 1.3900 195.00 ~ 200.00 円

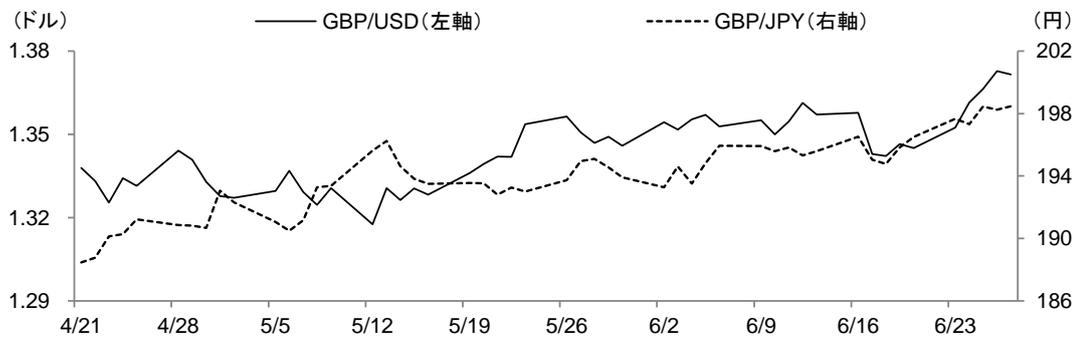
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は堅調推移継続。週初23日は1.34台で始まる。米国のイラン攻撃を受けたドル買いで始まり一時1.34を割り込むが、トランプ米大統領が原油、さらにはイランとイスラエルの停戦についてコメントすると、ドル買いが巻き戻される。トランプ大統領がパウエルFRB議長の後任を早々に指名するとのヘッドラインにドルがさらに弱含み、26日には1.37台へ。週末27日はリスクオンムードの中、株式市場は好況だったが為替市場の動きは限定的だった。英ポンドは対円で堅調推移。23日に197円台で始まると、ドル/円の上昇につれて198円台に。24日はドル/円の下落につれて197円台に戻るが、25日には再びドル/円が上昇し198円台へ。その後、週末にかけて198円台でもみあった。

今週の英ポンド相場は、上値重いながら堅調推移継続を見込む。英側からの材料は特段見当たらない。引き続きドル側の動きに拠った展開が予想される。直近のパウエルFRB議長の議会証言や後任人事にかかる憶測でFEDの7月利下げを期待する動きが見られる。今週は7月3日(木)の米6月雇用統計をはじめ米重要指標が目白押しとなっており、利下げを占ううえで注目される。(なお、7月4日(金)は独立記念日で米国休日となる)。また、関税ヘッドラインでは、米中の懸念が後退したもの、EU-米間の議論が予断を許さず、ユーロの動きに英ポンドも振られる可能性には留意。なお、通貨オプション市場で観測されるインプライドボラティリティは、英ポンドの動きを上下におよそ1%程度と織り込んでいる模様だ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/23~6/27)の値動き: (対ドル) 安値 1.3373 高値 1.3770 終値 1.3715
(対円) 安値 195.82 高値 198.81 終値 198.47



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 伊藤 基

(1)今週の予想レンジ: 0.6400 ~ 0.6570 92.50 ~ 95.50 円

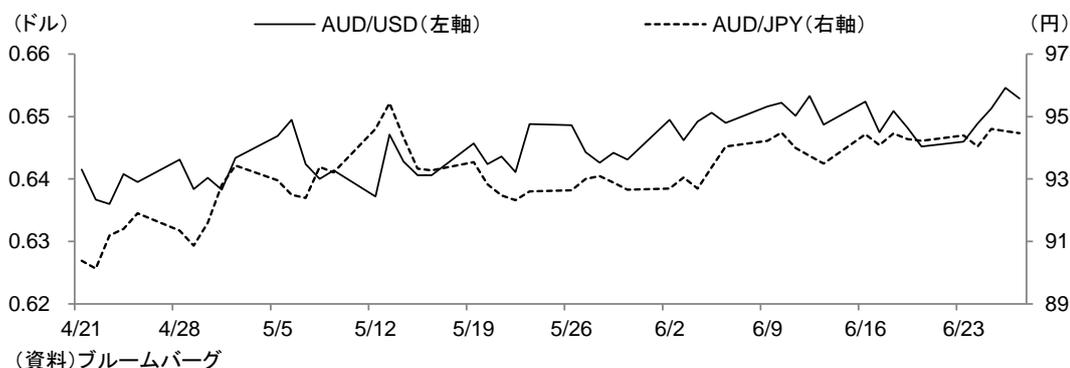
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は週初に安値を付けた後、週後半にかけて堅調に推移した。週末に米国がイランの複数の核施設に爆撃を行ったことを受け、幅広い通貨に対してドルが買われる展開となる中で、一時0.6370台まで下落する場面が見られた。ただ、その後は、イランからの報復攻撃があったものの、攻撃内容は限定的なものに留まると米国とイランの対立が激化するとの懸念が徐々に後退し、豪ドル相場も下げ幅を縮小させていった。翌24日にはイスラエルとイランの停戦を巡って様々なヘッドラインが流れたものの、市場の見方としてはイランを巡る地政学リスクは終息方向に向かっているとの見方が優勢。加えて、米国では半期に一回のパウエルFRB議長による議会証言が行われる中で、条件付きであったものの、早いタイミングでの利下げに言及したことから、ドル売り地合いとなり、豪ドルは上昇。25日に公表された豪5月CPIが市場予想を下回ると次回の7月RBA理事会での追加利下げ織込みが進んだものの豪ドル相場への影響は限定的であった。一方で、26日にはトランプ米大統領が次期FRB議長を早期に指名するとのヘッドラインが流れると、Fedのハト派転向が意識されて再びドル売りが優勢になり一時週高値となる0.6564まで上昇する場面が見られた。週末となる27日は、目立った材料がない中で、前日に付けた高値から徐々に水準を切り下げる展開であった。

今週の豪ドル相場は軟調な展開を予想。足許の豪ドルは米ドル安の裏返しとして、堅調に推移しているにすぎず豪ドルを積極的に買う材料は乏しいだろう。6月に入って公表された豪州の各種マクロ経済指標を見ると、総じて景気の勢いが鈍化している様子を示す内容が多い印象。特に先週公表された豪5月CPIは前月分から伸びが鈍化しており、物価上昇圧力が一段と減衰していることを示した。こうした状況ではRBAが景気に配慮する形で追加利下げのペースを加速させる可能性が高く年内3回まで織り込まれた利下げ回数が一段と増える余地が大きく残されているとみている。一方で、米ドル側に目を移すと、トランプ関税の発動を契機に幅広い通貨に対してドル売りが進んだが、当初に比べると各国との交渉スタンスも現実的な路線に転換しているだけに、一段のドル安を期待するのは徐々に難しくなっている。追加利下げ余地が大きく残されている豪ドルと更なる下げを期待しにくい米ドルという関係の中で、豪ドル相場は徐々に下値を切り下げていくと考えている。

(3)先週末までの相場の推移

先週(6/23~6/27)の値動き: (対ドル) 安値 0.6373 高値 0.6564 終値 0.6534
(対円) 安値 93.85 高値 94.85 終値 94.47



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。